

ひょうご 水百景

No.9 杉原川（多可町加美区鳥羽）

～天下の名紙「杉原紙」発祥の地～



写真-1 楮の川さらし（平成24年1月 杉原川にて）

■ 川さらし ～ 冷たく澄んだ水が紙をより白くする

多可町加美区鳥羽（とりま）、道の駅「R427 かみ」の対岸に町立杉原紙研究所があり、寒い時期になると杉原川の河原で楮（こうぞ）の白皮を「川さらし」している光景が見られます。

楮を蒸して皮をはぎ、黒皮を削り取って白皮を取り出し、その白皮を杉原川に一晩浸した上で、上の写真-1のように杉原川の流れに叩きつけて、白皮についた水アカなどの不純物を流し落とす作業をしているのです。きつい寒風にさらすほど良質の紙ができ、雪にさらすと漂白効果がさらに増すとか。

上の写真-1は、平成24（2012）年1月中旬に楮の川さらしの光景を撮らせていただいたものです。前方の護岸上の法面にはまだ雪が残っていますが、この日も雪がちらちら舞う寒い日でした。

杉原川の清く澄んだ流れと豊富に自生していた楮が育んだ天下の名紙「杉原紙」。1300年の歴史と伝統を誇った杉原紙も、近代化の波に押されて大正14（1925）年には杉原谷に紙を漉く家はなくなってしまいましたが、「幻の紙」と呼ばれた空白の半世紀を経て昭和45（1970）年に復元されました。

薄くてやわらかで、温かい白さをもつ手漉き和紙の製紙技術は、今、地元多可町やボランティアをはじめとする多くの人の努力によって保存・継承されています。



写真-2 左から和紙博物館、紙匠庵「でんでん」、杉原紙研究所



写真-3 杉原紙研究所にて撮影

■ 質・量とも日本一の名紙として古文書にも登場した「杉原紙」、いつしか“幻の紙”に

7世紀後半から多可町の北部・杉原谷で漉き始められたという「杉原紙」。奈良時代は「播磨紙」と呼ばれ、他の地方より進んだ製紙技術で写経用紙や薄紙を漉いていました。平安時代にはすでに質、量とも日本一の名紙として文献にも登場しています。昭和30年代に行われた正倉院の紙の調査によると、播磨国司が天平18(746)年に提出した『播磨国正税帳』に用いられている紙は他産地の紙に比べてはるかに技術が進んでいる、という結果が報告されています。

杉原谷は、平安中期から室町末期まで藤原摂関家(後の近衛家)の荘園とされ、「梶原庄(すぎはらのしょう)」と呼ばれていました。ここで漉かれた紙なので「梶原庄紙」と呼ばれ、のち「梶」の字が「杉」に変わりました。

鎌倉時代には幕府の公用紙として使用され、室町時代中期以降広く一般庶民にも使われるようになり、その名は全国に広まりました。江戸時代半ば頃からは、浮世絵、版画をはじめ庶民の日常生活にも広く使われるようになり、この頃、杉原谷には三百軒あまりの製紙業者があったといえます。明治時代になって産業転換が進む中、機械漉きの技術の普及や洋紙に押されて、大正14(1925)年、杉原谷での紙漉きの歴史はついにその幕を閉じました。そして、いつしか発祥も不確かな「幻の紙」と呼ばれるようになっていました。

■ 「杉原紙発祥之地」で杉原紙の紙漉き再現に成功

昭和15(1940)年8月2日、広辞苑編纂で有名な新村出(しんむら いする)博士と和紙研究家であった寿岳文章^{※1}(じゅがくぶんしょう)博士は、杉原紙のルーツを探して杉原谷村(現・多可町北部)を訪れました。のちに2人は、「杉原紙発祥の地は、播磨の国・杉原谷である」とする研究論文を発表しています。

これがきっかけとなって、戦中戦後の空白期間があったものの、「幻の紙・杉原紙」復活の機運が高まってきました。昭和41(1966)年、題字新村出博士、撰文寿岳文章博士による「杉原紙発祥之地」と彫られた石碑が杉原谷小学校内に建てられました。(現在は、杉原紙研究所の前に移設：写真-4)



写真-4 「杉原紙発祥之地」碑(石碑の前の植物は楮)

昭和45(1940)年には、郷土史家・藤田貞雄氏によって杉原紙の歴史を詳しく記した『杉原紙—播磨の紙の歴史』が刊行されるとともに、宇高弥之助氏をはじめとする紙漉き経験のあるお年寄りを中心に、実に半世紀ぶりに杉原紙の紙漉きを現代に再現することに成功しました。

※1 寿岳文章：1900年3月28日～1992年1月16日
英文学者、随筆家、書誌、和紙研究家、民芸運動家。
兵庫県明石郡(現・神戸市西区)押部谷生まれ。

家は鈴木家で父は寺の住職。姉の婚家である寺の養子となり、得度して寿岳文章となる。大正8(1919)年、東寺中学校卒業、関西学院高等学部英文科入学、大正13(1924)年、京都帝国大学文学部選科入学、昭和2年修了。昭和初期には柳宗悦(むねよし)の民芸運動に参加した。

全国の紙郷行脚を行い、文献資料と紙漉きの現場を結びつけて、幅広い視野で和紙史の展開を研究。和紙研究の第一人者的地位にあり和紙関係の著作も多い。『和紙風土記』のほか専門誌『和紙研究』には重厚な論考を数多く発表した。昭和12(1937)年、新村出の主導で結成された和紙研究会のメンバーとなる。昭和18(1943)年『紙漉村旅日記』を刊行、和紙研究に対する深い熱意をこめたものとして評価された。昭和27(1952)年、甲南大学教授。昭和35(1960)年から3年間、正倉院の古紙調査で主導的役割を果たした。昭和42(1967)年和紙の体系的な通史をまとめて『日本の紙』を出版。今日でも和紙研究の基本テキストとされる。



写真-5 昭和15(1940)年8月2日 清水の雲門寺にて

前列左から山口吉五郎杉原谷村長、関卓雲門寺住職、新村出博士
後列左から寿岳文章博士、宮田正夫杉原谷小学校長、藤田貞雄氏

■ 杉原紙の原料～楮

和紙の代表的な原料は、楮、三桠(みつまた)、雁皮(がんぴ)の3種類で、これらの韌皮(植物の外皮の下にある柔らかな内皮)繊維を中心に使われてきました。それぞれに優れた特質があり、いずれも繊維が長くて強靱で、光沢があり、和紙の特徴である薄くて強い性質をもっています。

杉原紙の原料は楮です。楮は、クワ科の落葉低木で本州以南の山地に自生しています。栽培がしやすく、繊維作物として各地で栽培されています。繊維の長さは15～20ミリと長く取り出しやすいことから、最もポピュラーな和紙原料です。強度に優れ、美しく、しなやかな仕上がりとになり、産地によって色や光沢、強さなどに違いがあります。書道用紙や障子紙、傘紙、版画用紙、提灯紙のほかさまざまな加工品などに幅広く用いられています。

旧加美町では、平成6(1994)年に地元産楮100%をめざして「こうその一戸一株運動」が始まり、今では1000戸以上の家がこの運動に参加しています。また、奥荒田地区では、「奥荒田楮互助会」が「こうその森」で栽培しています。このような取り組みにより使用量のおよそ7割を地元産で賄っています。



写真-6 写真奥荒田地区の「こうその森」



図-1 杉原紙研究所周辺の地図

■ 天下の名紙「杉原紙」づくりに欠かせない杉原川の水

紙漉きを使用する水の状態として下記の3点があるそうです。

1. 優れた紙を漉くために、常に十分な水量が確保されていなければならない。
2. 水質は、色、浮遊物、鉄分およびマンガンなどを含まない清水であること。
3. 粘剤※2(ねりざい: トロロアオイから取る)が十分な働きをするには軟水が望ましい。

また、『和漢三才図会※3』には「紙を漉くには谷川の水を以て佳しと為す」とあります。加えて、楮皮をさらすには、平らな河床をもち、流れがゆるやかであることが必要です。杉原川上流部は、そうした立地条件を備えており、寿岳博士の言葉を借りると、「紙漉き村の川として理想的」だそうです。杉原川の冷たく清らかで、かつ緩やかな流れが、「天下の名紙・杉原紙」を育ててきたといっても過言ではありません。

※2 粘剤: 「ねり」とも呼ばれ、水中で原料繊維の分散を助ける役目をする。

※3 和漢三才図会: 大坂の医師・寺島良安によって江戸時代中期に編纂された日本の類書(百科事典)。全体は105巻81冊に及び絵入りの百科事典で30年余りかけて編纂され、正徳2(1712)年に成立した。

■ 杉原紙ができるまで

楮の原木が紙になるまで約 1 ヶ月かかります。作業工程は 12 を数え、手間がかかり、粘り強い根気を必要とし、厚み、しわ、ゴミ、繊維の並び、紙肌に気を配っていても、漉いた日により出来上がりが違う、とてもデリケートかつ過酷な作業です。

和紙には樹皮（白皮）だけを使うため、原木 50kg に対して紙になるのはわずか 1.5kg（約3%）です。

12 の作業工程は、以下のとおりです。

① 楮刈り

楮は、春に株から何本もの芽が伸び、その年の秋には 2～3m になる。霜が降り葉が散ると刈り取り、1.2m の長さに切り揃える。なお、夏に刈るとその株は枯死するそうです。

② 楮蒸し

皮をはぐために、切り揃えた楮を大きな桶で蒸す。

③ 皮はぎ

蒸した楮は、熱いうちに皮をはぐ。不用となった心材は、トマトやナスなどを育てる際に用いる支柱や、薪、杖などに利用される。

④ 黒皮とり

樹皮のうち外皮である黒皮を包丁で削り取って、内側にある白皮だけにする。

⑤ 川さらし

白皮を杉原川に一晚浸し、付着している表皮の削りかすや水アカを洗い落とす。その後、干して乾かす。きつい寒風にさらすほど良質の紙ができ、雪にさらすと漂白効果がさらに増す。

⑥ 釜だき

白皮をアルカリ性のお湯で煮て繊維を軟らかく短くする。ソーダ灰の液で煮る。繊維のまわりの不純物を水に溶けやすくする。

⑦ 楮みだし

清流で不純物を流し去ったあと、「チリ」を取り除く。

⑧ 紙たたき

繊維をほぐすために、機械または木槌でたたく。

⑨ 紙漉き

水を張った漉舟に原料を入れて攪拌、そこへ粘剤（ネリ）を添加、よく溶かしこむ。流し漉きの技法を用いるので薄手の紙ができる。この技法は、杉原紙が最も早く採用したとか。簀桁（紙漉き道具）を使って 1 枚 1 枚漉いていき湿紙を積み重ねていく。積みあがった湿紙の束を紙床という。

⑩ 圧搾

積み重ねた紙を一晚放置し、翌朝ジャッキで圧搾する。

⑪ 紙干し

圧搾した紙を一枚ずつはぎ取って鉄板に刷毛で貼り付けボイラーで乾燥させる。干し板に貼り、天日で乾燥させることもある。

⑫ 選別

和紙を一枚一枚検査する。



写真-7 皮はぎ作業



写真-8 皮はぎ後の心材



写真-9 皮はぎ後



写真-10 寒風にさらす

■ 手漉き和紙「杉原紙」の製紙技術を継承していくために～杉原紙研究所

昭和 45 (1970) 年の杉原紙復活を受けて、旧加美町は昭和 47 (1972) 年に「杉原紙研究所」を現在の「道の駅・R427 かみ」のある場所に開設し、町をあげて製紙技術の保存・継承に取り組んできました。その結果、昭和 58 (1983) 年には兵庫県重要無形文化財、平成 5 (1993) 年には兵庫県伝統的工芸品にそれぞれ指定されました。

平成 8 (1996) 年、町立杉原紙研究所は道の駅のオープンに合わせて対岸に新築移転しました。その際、研究所施設は、従来の作業場的なつくりではなく、実習室を備え展示スペースを確保するなど施設の充実を図っています。また、河原で楮の川さらし等の作業をしやすくするために県によって階段護岸も設けられました。現在、町職員 1 名、嘱託職員 4 名にシルバーを加えたメンバーで管理・運営されています。

杉原紙の製紙技術を保存・継承し、和紙文化を次代に引き継いでいくためには、情報の発信や和紙の需要の掘り起こし、人づくりが重要です。

平成 12 (2000) 年には、寿岳文章博士の蔵書等を保管する和紙博物館「寿岳文庫」が建てられ、平成 14 (2002) 年からは、皇居で行われる歌会始に杉原紙が使われるようになりました。

同年 4 月には、和紙博物館の隣に「紙匠庵でんでん」が建ち、杉原紙を使った作品などが展示・販売されています。

平成 18 (2006) 年の「のじぎく兵庫国体」では、厚手に漉かれた杉原紙が賞状として使われ、平成 21 (2009) 年には多可町内の全小学校で杉原紙の卒業証書づくり (写真-12・13) が始まり、毎年行われている「杉原紙年賀状コンクール」は平成 24 (2012) 年時点で 16 回を数えています。



写真-11 杉原谷小学校の紙漉き実習室「春蘭の家」



写真-12 杉原紙の卒業証書づくり



写真-13 杉原紙の卒業証書づくり

■ モノローグ

杉原紙の原産の地と知られをり
われを育みし播磨杉原谷

杉原紙の原産地の名は残れども
紙を漉く家いま村になし

これは、多可町加美区清水 (きよみず) 出身のアララギ派歌人、山口茂吉の歌です。昭和 17 (1942) 年に刊行された『歌集 杉原』には、このような故郷を想って詠んだ歌が多く、清水地区には「歌人 山口茂吉のふるさと～歌の散歩道」というのがあって、随所に歌碑が立てられています。

杉原紙に寄せる思いも人一倍あったと思いますが、杉原紙復活を知ることなく昭和 33 (1958) 年 56 歳でこの世を去りました。



写真-13 山口茂吉
(Wikipedia から引用)



写真-14 山口茂吉の歌

杉原川の冷たく澄んだ清らかな水が育んだ天下の名紙「杉原紙」。1300年にわたり受け継がれてきた和紙づくりのDNAを地域の宝として次代に継承していくために、しびれるような寒さの中黙々と和紙づくりに取り組んでいる人たちがいます。パソコン全盛の時代、電子書籍などというものができて、紙文化の行く末が不透明な時代ではありますが、やさしく温かな紙の手ざわりは液晶画面からは伝わってきません。漂白剤を使用せず、自然の「白」にこだわる杉原紙づくりがいつまでも続いていくことを願ってやみません。

【参考資料】

- 1 『杉原紙』・『寿学文庫』パノラマ 杉原紙研究所・寿学文庫
- 2 まんが版『杉原紙の歴史』 多可町 平成12年7月
- 3 『杉原紙—播磨の紙の歴史』 藤田貞雄著 平成7年8月
- 4 『杉原紙の里』HP <https://sugiharagami.takacho.net/>
- 5 『寿岳文章、和漢三才図会、山口茂吉』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成24(2012)年2月 『ひょうご水百景』No.9
改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』No.9



写真-15 夏には杉原川の河原で遊ぶ子供たちの姿が見られます